

帰化植物 (1)

先月号に登場したアツミゲシ・ナガミヒナゲシはいずれも 1960 年代に日本に入ってきた帰化植物です。

何とオオイヌノフグリ・ムラサキカタバミ・ニワゼキショウ・シュウカイドウ等、懐かしい草花達も意外にも帰化植物とか。

では帰化植物とは何？図鑑によると「人力によって、意識的にせよ無意識的にせよ、一つの植物が本来の生育地から、そのものが自生していない新しい地域にもたらされて野生化し繁殖し、その植物の歴史を知らなければその土地本来の自生種と一見区別のつかないようになっている状態」となっています。

うーん、読み下し文がほしい感じがですが、外国からやってきて今や日本人の郷愁に訴えるまでになった帰化植物はどんな方法で来日したのでしょうか。

明治初期、国指定の貿易港として開港した門司港のある北九州は帰化植物の先進地として知られていました。輸入品や来日した人々の衣服・靴等についてやって来たからです。このように以前は港や輸入原料を扱う工場周辺、牧草地などでよく見られました。

その他にも、色々な方法で日本を第二の故郷にした植物たちがいます。

たとえば園の南ゲートから入り右手の大きな通路沿いに植えられ、タンポポに似た黄色の花‘ワタゲハナグルマ（アークトセカカレンデュラ）は、帰化植物のパターンの一例として知られる植物です。

オシロイバナやトキワツユクサ等たくさんの例にみられる来日方法は？

花 暦 文 月

文：花咲くおばさん

森のなかま・オウギバト

～オウギバト生まれました～

5月25日にオウギバトのヒナが生まれました。

生まれてすぐのヒナは羽も生えてなく丸裸な状態で生まれるので親がお腹の下に抱いて育てます。ヒナが見られるのは親から食べ物（ミルク）をもらう時、かわいい顔がちょこっと見えます。このタイミングを逃すと再びヒナはお腹の下に隠れてしまいます。ヒナがもらうミルクとは母乳ではありません。

ハトは堅い木の実や種を主食とするためヒナに直接与えることができません。そこでのどにあるそ嚢というところで食べ物を砕き、ペース状にしたものをヒナに与えます。これがハトミルクです。元気に親の口ばしに顔を突っ込んでミルクをもらう姿は愛らしいです。しかし鳥の成長は早いもので一ヶ月もすれば巣立ちです。今では親が抱くことのできないくらい体も大きくなり、バタバタと羽を動かし巣立ちに向けて準備中です。

この記事を読まれた頃には、元気に獣舎の中を駆け回っているかも……。ぜひ見に来てください。

